

読む力を育てる読書活動の開発 ～効果的な読みの仕掛け～

大阪市立鶴見南小学校 古沢 由紀

目次

- 1 問題の所在
- 2 伝記教材の取り扱いについて
- 3 効果的な読みを行う手立て
- 4 授業の概要
- 5 授業の実際
- 6 成果と課題

1 問題の所在

平成 27 年 2 月に国立教育政策研究所が公表した「小学校学習指導要領実施状況調査」によると、「効果的な読み方を工夫すること」などに課題があることが明らかになった。また、「同調査結果概要」には、指導上の改善点の一つとして、「読書に親しむ態度を育成する指導の充実」があげられている。

これまでの読書活動においては「親しむ」ことが中心であったが、新学習指導要領では問題解決的な読書を「効果的に読む力」の育成につながると示唆している。つまり、「効果的な読み方」とは、溢れる情報の中から自分にとって必要な情報を見極め、課題を解決し情報を活用(表現)していく力であると言える。

さらに、本校では平成 29 年度学力学習状況調査において国語科「読むこと」における正答率は 59 パーセントとやや全国平均より低い結果であった。また、同年 4 月に実施したアンケートでは、「読書は好きですか」という回答において学力が高い児童は「好きである」と答える回答率が高い傾向が見られた。一方、「好きではない」と答えた児童は学力が低い傾向にあった。

その理由として、「どのように読めば良いか分からない」、「(作者が)何を言いたいのかわからない」という意見が多くあった。児童の目線に立ち、明確な目的が見いだせる工夫が必要である。つまり、「これから何を学ばよいか」を自覚させ、「効果的な読み」を活用する授業を行う必要があるといえる。

以上のことを踏まえて「効果的な読み」を整理すると以下の観点になる。

①解決すべき課題が明確で、本(文章)を読み進めなくてはならない状況を設定すること

②理解したことを表現したいというような思いを学習者に醸成させていくような仕掛けを作ること

③一つの本(教材)だけでなく、複数の本を読む単元構成を設定すること

以上のように、育成すべき能力は明確となったが、問題はどのようにして「効果的に読む力」を身に付け「読書に親しむ」児童を育成するかである。苦手意識のある児童が「どう読み進めれば良いのか」という読みの視点を獲得し主体的に読書活動に取り組めるようにしたい。つまり、効果的な読み方で学習し、多読を保证する単元の構想、すなわち教師の仕掛けが必要なのである。

本単元では「注文の多い料理店」を通し、読解だけでなく作者の世界観を探すことに目を向けて読み進めていきたい。第 1 次から第 3 次までに至るまで、効果的な読みが有効に機能すれば、学習者がより文章に親しみ、楽しく、そして自然な思考過程を辿りながら表現していける学習が展開できると考えたのである。その上で、第 1 次において伝記教材を用いた単元構想に取り組んでいく。

2 伝記教材の取り扱いについて

ここで本単元において扱う「宮沢賢治」の教材について触れたい。これまでも伝記教材と物語教材を組み合わせた単元の授業は数多く実践されてきている。しかし、どんな目的で何のために伝記教材を扱うのか曖昧な実践が散見される。伝記教材を用いて「何をするか」という発想ではなく、「何のために」伝記教材を読むのかという目的機能から実践を考えることが有効ではないだろうか。

その上で、伝記教材の取り扱いについては十分な留意が必要である。伝記教材の扱いについて、牛山(2014)は以下のように述べている。

教材であっても文学作品は、それ自体として読まなければならない。作家の伝記を知った上で、それを前知識として作品に作者の姿を見ようとしたり、伝記を

下敷きとして作品を解釈しようとしたりしたのは、作品そのものを読んだことにはならない。その点で、伝記と作品との教材化には文学そのものの読みの成立を図る上で問題があることを十分認識しておかなければならない。まずは、宮沢賢治の作品をいろいろと読んで、その世界を楽しむという体験をさせるべきなのである。

牛山が述べる読者の読みを中心とした読解の重要性は示唆に富むものがある。しかし、牛山の主張は前述した問題の所在に当てはめて見ると探究的・問題解決的な学習過程であるとは言いがたい。

特に、文章を読んでも「何が言いたいかわからない」と言う児童にとっては、宮沢賢治の作品の良さを自然に感じるようになるまでに相当な時間を費やす必要があるだろう。

例えば、宮沢賢治の代表作品である「やまなし」は物語の主題性を捉えるには難解な教材である。だからこそ、伝記教材を用いて作品を解釈していく問題解決型の読み方をしていく必要がある。作者の生涯を知らなければ解釈できない箇所が大いにあるからである。

3 効果的な読みを行う手立て

①解決すべき課題が明確で、本(文章)を読み進めなくてはならない状況を設定すること

学習の導入時に、宮沢賢治の考え方や理想を並行読書の中から調べるという学習の見通しをもたせる。その際、留意すべき点は伝記に書かれている賢治像を児童に押し付けないようにしたい。教科書に書かれていることをそのまま受け止めてしまうと、「宮沢賢治はすごい人」という印象だけで終わってしまう。

そのようにならないために、第1次の2

時では、様々な伝記教材を児童に用意し、比較を通して出た疑問や問題を課題として扱うようにした。子どもたちはそれぞれの筆者が「宮沢賢治」という人物の捉え方が異なる点や、年代や生涯にかかわる記述は相変わらない共通点などを見つけることができた。

そこで、並行読書して作品を読み進めていく共通の課題として「宮沢賢治の目指した理想」と「宮沢賢治の生涯と作品とのかかわり」等について多くの作品から探していくという見通しを立てることができた。

②理解したことを表現したいというような思いを学習者に醸成させていくような仕掛けを作ること

第2次の1時で注文の多い料理店」を一文にし、全体を捉えて要約した学習を第3次のポスター作りで生かす児童もいた。また、2時では、物語の全体の構成を捉え、山猫の世界への入り口と出口を考えさせたり、注文の文章を吟味し、どこでおかしいと気づいたか考えさせたりした。

第3次では、並行読書してきた本の中からお気に入りの一冊を選ばせ、グループ内で役割分担しポスターセッションを行い、学習した内容を表現する場を設定した。他にも、図書の時間を用いて児童に「読書郵便」を紹介した。すると、友人や家族など沢山のの人に賢治作品を他者に伝えようと意欲的になる児童もいた。

③一つの本(教材)だけでなく、複数の本を読む単元構成を設定すること

並行読書してきた中で、一番気に入った作品を選ばせる際、今まで読んできた内容が一目でわかるよう、第2次の1時では、内容を一文にする学習を行った。その学習内容を活かして「一文リスト」に読んだ本の内容を一文で書き表すようにした。

4 授業の概要

(1)単元名 『「注文の多い料理店」～宮沢賢治が伝えたいこと～』

(2)教材名 「注文の多い料理店」(東京書籍 5 年)

(3)単元構成(13 時間)

(4)目指す児童の姿

○物語の展開や登場人物の相互関係や心情を表す場面についての描写を捉えることができる。

○物語の面白さについて読んだことを伝え合うことを通して自分の考えを深めることができる。

○物語の作者に関連する本を読み、自分の言葉で作者の考えを表現することができる。

次	時	主な学習活動
1		<div>学習課題：賢治が理想とした生き方や考え方について考えよう。</div> <p>1 宮沢賢治の考え方や理想を並行読書の中から調べるという学習の見通しをもつ。 複数の伝記教材を比べ読みする。</p> <p>2 宮沢賢治の生涯をワークシートにまとめる。</p> <p>3</p>
2		<div>学習課題：「注文の多い料理店」を通して宮沢賢治の考えを読みとろう。</div> <p>4 「注文の多い料理店」を一文にし、全体を捉えて要約する。</p> <p>5 物語の全体の構成を捉え、山猫の世界への入り口と出口を考える。</p> <p>6 注文の文章を吟味し、どこでおかしいと気づいたか考える。</p> <p>7 最初の場面と最後の場面を比較する。</p> <p>8 「注文の多い料理店」を通して賢治が伝えようとしたことについて考える。</p>
3		<div>学習課題：宮沢賢治が求めた理想を見つけよう。</div> <p>9 並行読書した中で、一番気に入った作品を選び、選んだ作品でグループに分かれて好きなところを交流する。</p> <p>10</p> <p>11 並行読書してきた本の中から賢治の生き方が分かる箇所を探し出す。</p> <p>12 グループ内で役割分担し、発表に向けて準備を行う。</p> <p>13 調べたことをもとにポスターにまとめていく。 ポスターセッションを行う。</p>

本教材の特性を捉え、一貫した「効果的な読み」を仕掛けることにより、学習者は「どう読み進めればよいか」を明確にすることができる。つまり、単元の導入時に三次の学習の見通しを持たせて、並行読書を開始させ多読を促す授業である。次に示すものはその授業の実例である。

5 授業の実際

第1次

【第1時】〔全体を捉える〕・・・第2・3次と関連

宮沢賢治という作者に興味を持たせるために、賢治の代表作品「よだかの星」や「セロ弾きのゴーシュ」等の本を用いてブックトークを行った。いずれも代表的な作品であり、賢治が作品に込めるメッセージが読み取りやすい。子どもたちは「他の作品も読んでみたい」と口々に話し出したので、賢治の作品を並行読書していくことを伝えたと喜ぶ様子が見られた。一方、読書が苦手な児童は多くの作品を読み進められるかどうか不安な様子だった。また、並行読書していく本の中から一冊お気に入りの本を決める目的を持たせた。また、読み進めていく際に作者は読者に対して「何を伝えようとしているのか」を意識しながら読み進めていくように声をかけた。児童が読んだ本の内容を忘れてしまったり、途中で飽きてしまったりすることのないよう、手立ての一つとして「宮沢賢治の作品ブックリスト」を持たせた。また、読み進める達成感を得られるように、一つの作品を読み終えたらシールを貼り一目で分かるようにした。さらに、読んだ作品を一文に要約し書き溜めていく「作品一文リスト」も作成した。第2次の1時でも行うが物語を一文に要約し友達と共有するように促した。

【第2時】〔目的意識〕・・・第3次と関連

第2時では「宮沢賢治」の伝記を読み、賢治自身の生涯を知ることにより作者への関心を持たせ、今後の学習の目的観を明確にさせたい。

まず、複数の伝記を読み、高い理想に向かって生きてきた賢治の人物像により一歩迫る。班で教育出版と東京書籍の「宮沢賢治」と光村図書の「イーハトーヴの夢」の伝記教材を読み比べさせる。そして、賢治の理想や考えに当たる文を抜き出しノートにまとめさせたり、

比較して読んで疑問に思ったりしたことを交流させた。

以下は授業の逐語記録である。

T:「3つの伝記を読んで見て気づいたことはありますか」

C:「3つとも宮沢賢治の生涯や理想について書かれていました」

C:「でも3つとも全く同じ内容ではなく、少しずつ書かれている内容が違う気がする・・・」

C:「私のグループでも同じような意見ができました。教育出版の伝記は宮沢賢治がすごい人なんだなってよく分かるような内容でした。東京書籍の伝記は宮沢賢治の生涯が書かれていて分かりやすかったです。光村図書のイーハトーヴはイーハトーヴの地図があって面白かったです。3つは全く一緒ではないと思います」

T:「なぜ同じ人が書いているのに内容が違うのでしょうか」

C:「・・・(考える)」

C:「書いていることは同じでも、やっぱり書いている人が違うからその人の考えが少し入るのかなと思いました」

T:「なるほど。伝記はどれも同じ人について書かれてあるけれど、人それぞれの捉え方がありそうですね。みんなはこれから色々な作品を読んで、どんなことを作者が伝えようとしているか考えながら読んでみましょう」このようにして、伝記教材そのものに傾倒するのではなく、比較を通してそれぞれ筆者の見方があることを理解した。また、それぞれの教材で共通していた「賢治の理想」を書きだしたワークシートを探して読み進めていくという「目的」を持つことができた。

【第3時】〔伝記教材〕・・・第3次と関連

ここでは、前時で行った学習を踏まえて賢治の生涯を振り返り、それぞれの作品に書かれた時期や背景をおさえていく。賢治の生涯を年表にまとめていくことで、彼の追い求めた理想が作品と深く繋がっていることを掴ま

せたい。前時と同じように班のグループで伝記教材を読み、年表型のワークシートに賢治の生涯と作品名を書き込めるようなワークシートを作成した。

そして、各グループで調べたことを発表しあい気づいたことを発表しあった。すると、作品が賢治の生涯とつながりがあると考え始める児童もいた。

T:「ワークシートにまとめることができましたか」

C:「グループで話し合っただけ気づいたことなのですが、宮沢賢治の物語が出来上がった時期と、宮沢賢治の生きてきた生涯と何か関わりがあるのかなと思いました」

C:「そうだったら、探していくのが面白いな」

T:「目の付け所が鋭いですね。他の作品や「注文の多い料理店」の出版された時期も調べてみましょう」

第2次

【第4時】「物語を一文に表す」・・・第1次・第3次と関連

「注文の多い料理店」の範読を聞き、登場人物や場面を整理する。また、初発の感想の代わりに、物語のおおまかな流れをおさえるために「〇〇が〇〇して(したが)〇〇した話」というおおまかな型に沿って物語を要約させる。登場人物を主語に置くことで様々な文を作り交流することができた。この学習に沿って、第一次で説明した「作品一文リスト」の書き方を再度おさえる。

その後、学習の振り返りを書く際に『注文の多い料理店』を読んで疑問に思ったことを書かせた。その中に「いつから不思議な世界になったのか」「しんしはいつから気づいていたのか」「顔が変わったのはなぜか」等の意見があったため、それらを学習課題として取り組んだ。

【第5時】「物語の構造」・・・第3次と関連

山猫の世界の入り口と出口は一体どこなのか考えさせることで、物語の構成を掴ませる。

「この物語には入り口と出口があります。入り口と出口は同じ場所かな。違う場所かな」と問うと、勘の良い児童は「同じ場所だから、同じ文章の所が怪しい!」と探し始めた。そして、「山猫世界の入り口と出口の表現」が「風がどうとふいてきて、草はザワザワ、木の葉はカサカサ、木はゴトンゴトンと鳴りました。」である一文であることをおさえた。そして、この物語では現実→山猫の世界→現実という仕掛けがあるため、三部構成であることを捉えさせた。

→この構造を捉えた児童は第3次のポスターセッションで他の作品においても構造読みに関する内容を発表する事ができていた。

【第6時】「山場の根拠」・・・第3次と関連

注文の文章から二人の若い紳士側と山猫側の解釈の違いをまとめていく。「扉に書かれた注文」に対して紳士の受け取り方と山猫の考えが相反していることをおさえる。そこから、登場人物の性格や考え方を読み取っていく。そこで、「二人のしんしはどこで、食べられると気づいたか」という課題を設定する。このとき、地の文や会話文から心情を捉えることで、じわじわと迫る恐怖感に気づかせたい。二人の若い紳士側と山猫側の解釈の違いをまとめ、扉に書かれている「注文」に対する二人の紳士の会話文に着目し、紳士の性格を捉えさせたため、様々な意見が出た。

そして、注文に対する紳士の会話から紳士は「二人とも気づかないので楽観的」という意見もあれば、「お互い見栄っ張りだと思う」、「自分のほうが何でも知っているといたいだけだと思う」などの考えを発表していた。二人の紳士とも、自分の言葉を相手に受け入れさせることで、相手よりも優位に立ちたいのである。そのために、「注文」をできるだけ「合理的」に解釈し、相手よりも物知りであることで圧倒しようとしたり、自分の方が偉いことを相手に分からせたりしようとする。お互いが見栄の強さから「優位に立ちたい」

という思いが強い性格であることが読み取れた。

一方、山猫の書き方に対して「よく人間のことを知っていて賢い」という意見や「食べることは悪いことじゃないから、山猫は悪くない」と話す児童もいた。最後に自分の言葉で山猫と二人のしんしの性格を一文にして交流した。

→第3次のポスターセッションでは考えの根拠に関する内容を発表する事ができた児童もいた。

【第7時】〔場面の比較〕・・・第3次と関連

ここでは物語の最初と最後の場面を比べて読み、変わったところと変わらなかったところを考えさせる。物語の始めと終わりで変わったものと変わっていないものについて考え、賢治が物語に込めた「読者に伝えたい理想」を捉えさせたい。

T:「山猫の世界へ行った紳士たちはどうなりました。」

C:「紳士たちの顔がくしゃくしゃになりました。」

T:「そうでしたね。紳士たちは山猫の世界へ行って、見栄っ張りな性格も変わったのでしょうか。」

※見栄の度合いを表す数直線を書く。見栄が強ければ数値が上がり、少ないなら数値が下がると説明する。

C:「私は1と思います。なぜなら、服装も顔も変わっているからです。」

C:「変わっていないと思うので、5です。理由は見栄で山鳥を最初も持っていこうとしていたのに、やっぱり最後も山鳥は手放さなかったからです。だから、顔は変わっても、見栄の部分は変わっていないと思います。」

数値化することにより様々な意見を交流することができた。最後にそれぞれの意見を聞いた後、一番納得のいく意見を話していた児童について振り返りを書くように指示する。

→第3次のポスターセッションでは場面との

比較に関する内容を発表する事ができた児童もいた。

【第8時】〔作者の意図〕・・・第1次・第3次と関連

これまでの学習を踏まえ、この物語を通して賢治が読者に伝えようとした理想について考えさせたい。第1次でまとめたワークシートを照らし合わせて「注文の多い料理店」に込めたメッセージについて班で考えさせた。その際、児童が自分で考えた賢治の理想を大切にさせつつも、「なぜそう考えたか」「そう考えた根拠は何か」を中心に話し合うように促した。苦手意識から読み取ることが難しい児童も、ワークシートをもとに考えることができていた。

T:「『注文の多い料理店』を通して宮沢賢治は何を伝えようとしていたのでしょうか。自由に考えを友達と話し合ってください。その際、必ずそう考えた理由と根拠となるページも探し出しましょう」

C:「紳士たちの顔が「くしゃくしゃ」になってもとに戻らなかったことは、悪いことをしたら罰がくることを言いたかったのかなと考えました」

C:「私は『どんぐりと山猫』も読んだからだけど、山猫がどっちの作品にも出てきて、どっちの作品にも人間の見栄みtainなのが出てくるから、そういう風に見栄ばかりの人間になったらあかんでっていうことを伝えたいと思いました」

C:「私はさっきの意見と似ているけど、教科書〇ページに書いてある「山鳥」を最初も持っていこうとしていたのに、やっぱり最後も〇ページに「山鳥」が出てきたから最後まで欲深い紳士への罰だと思います。だから、宮沢賢治は罰のことを言っていると思いました」

T:「どんぐりと山猫の話も出ましたね。では、次回から自分の気に入った作品を選び、グループになって宮沢賢治の理想について考えていきましょう」

次時では並行読書の中から気に入っている作品を一つ選び、読書活動を行うことを伝え、第8時と同様に「考えの根拠となる文」を探していくように伝えた。

第3次

【第9時・10時】〔並行読書〕・・・第1次と関連

並行読書してきた作品の中から一番お気に入りの本を選ぶ。児童は心待ちにしていた様子だった。3～5人のメンバーになるように構成した。作品が決まったらグループメンバーに向けて、この作品の良さや気に入っている文章を紹介させた。紹介がおわったら、構成や叙述に着目して再読するように指示した。

【第11時・12時】〔活用〕・・・第1・2次と関連

前時で行った学習を振り返り、それぞれのグループで再度作品から感じる宮沢賢治の理想を話し合う。

話し合いの後、グループの中で役割分担し、賢治の理想と根拠となる文や賢治の人生と作品とのつながりを見つけていくように指示する。ポスターセッションにしてまとめる前にワークシートに構成図を書いてから取り組むように指示した。

構成する際は今まで学習してきた事柄と結び付けられるように、ノートやワークシートを参考にして話し合いを進めていた。

【第13時】〔評価〕

発表の後、これまでの取り組みについて自己評価する。また、他の作品の発表においても賢治の求めた理想がよく理解できたか評価するように指導する。

6 成果と課題

本単元を終えて、児童は宮沢賢治以外の作者にも興味を示すようになった。また、同年4月に実施したアンケートと本単元を終えた後にとったアンケートを比べると、「読書は好きですか」という回答において「好きで

はない」と答えた児童の80パーセントが「読書が好きだ」と回答するようになった。同様に、国語に対し苦手意識があり意欲的ではなかった児童も「国語が好き」の回答が増えていた。また、「一番楽しかった学習」という回答では9割以上の児童が「宮沢賢治」の学習と答えていた。残りの1割の児童は難しかったが、楽しく学習できたと答えていた。

宮沢賢治の作品そのものの魅力は大人でも難しいと感じる部分があったが、漠然とした読みを与えるのではなく目的意識のある読みを取り入れた学習を展開すると苦手な児童にとってハードルが低くなりことがわかった。また、高い理想を持ち、それに向かって生きてきた賢治の物語の世界に触れ、その生き方を知ることにより、文学作品の面白さや奥深さを知ってほしい。

児童のポスターの一例

